The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 解釈学の実践的理念 : 人間存在を問う解釈学的哲学の可能性について |
| Author(s) | 佐々木, 正寿 |
| Citation | メタフュシカ. 2007, 38, p. 59-71 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/12293 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 解釈学の実践的理念
## ── 人間存在を問う解釈学的哲学の可能性について ──

佐々木正寿

### はじめに

『風土――人間学的考察――』（1935 年）の序言において和辻自身述べているように、彼は 1927 年にベルリンでハイデガーの『存在と時間』（1927 年）を読んだことによって、人間存在の根本構造をめぐる思索の決定的な動機を得たといってよい[1]。それはまず、周知のように、ハイデガーがことさらに人間的現存在の時間性の契機のみを強調していることを批判したうえで、むしろ時間性と空間性を相即するものとして捉え、それゆえ歴史性と風土性を人間存在の根本契機と見なすことになったということである。だが、そればかりではなく和辻は、『存在と時間』において展開された「現存在の現象学」、つまり現存在についての現象学的解釈をつうじて、ハイデガー独自の「解釈学」に接することになった。そして実際､和辻は『人間の学としての倫理学』（1934 年）において、ハイデガーによる現存在分析のあり方に言及するとともに、解釈学を倫理学の方法として位置づけたのであった。

こうして私たちは、和辻の倫理学構想のうちに、「解釈学」の理念、あるいは解釈学的方法の理論を見出すのである。この際――とくにハイデガーの「解釈学」の理念を、『存在と時間』にとどまらず初期フライブルク講義へと遡及して顧慮するならば、なおいっそう明瞭に――ハイデガーと和辻に見られる「解釈学」の理念のうちに、ひとつの本質的な根本動向を認めることができると思われる。それは、学的・理論的立場としての解釈学にとどまらない解釈の遂行そのものという実践的意味と、いわば《生の遂行と哲学的思索との一体化》を志向する態度である。

本稿では、まず和辻の倫理学における解釈学的方法の基本理念とハイデガーの現象学的解釈学の根本動向から、解釈学の本質契機としての実践的意味を表明的に取り出し、次いで現存在ないし人間存在のあり方を問おうとするそのような解釈学に関して、学としての可能性を批判的に検討することを目指している。

---

[1] 和辻哲郎、『和辻哲郎全集』第 8 巻、岩波書店、1962 年、2 頁参照。

## Ⅰ　和辻の倫理学と解釈学的方法

『人間の学としての倫理学』における和辻の所論にしたがえば、倫理学は「倫理とは何か」と問う学問であり、そこで問われる事柄である倫理は「人々の間柄の道」として、「人間の存在の仕方」である[2]。したがってこのような倫理学は、「人間の存在の仕方」を問うもの、つまり一種の存在論として性格づけられる。しかも、和辻の強調するように人間存在が個人的存在であるとともに「間柄的存在」であるとすれば、「倫理」の学は「間柄的存在」の学、つまり「人間」の学でなければならない。こうした意味において和辻は、「人間の学としての倫理学」という理念を提示するのである。

「人間の学」として構想された倫理学は、「人間の存在の仕方」を問う存在論として、和辻の所論にしたがえば、次のような固有の性格をもっている[3]。

(1)「人間の学としての倫理学」は人間存在の根本構造を問う倫理学として、「問い」という人間存在のひとつの仕方において、その存在それ自体を究明しようとする。つまり、「人間の学としての倫理学」の理念のもとでは、「問うもの」と「問われるもの」とが同一であり、それは人間存在にほかならない。

(2)「人間の学としての倫理学」において「問われるもの」は人間存在であるが、それは同時に「問うもの」でもあり、したがってこの倫理学は、人間存在をあくまで「実践的行為的主体」として把握しなければならない。つまり、「人間の学としての倫理学」においては、たんなる主観–客観関係の枠組みを適用することはできない。

(3)「人間の学としての倫理学」は、あくまでもひとつの「学」ないし「理論的反省の立場」であるかぎり、問われている人間存在の仕方を表明的に分節し、一定の意味連関へ転換しなければならない。

(4)「人間の学としての倫理学」において問われている「主体的なもの」としての人間存在は、直接的に見ることができないので、この倫理学は、私たちの周囲に見出されるすべての事物を主体的な人間存在の「表現」――この主体が「外に出る」ことによって客観となったもの――と見なし、これをつうじて実践的行為的主体としての人間存在自身を把捉しようとする。

こうして、和辻の構想する「人間の学としての倫理学」は、それ自身「問い」として人間存在のひとつの仕方でありつつ、その存在それ自体を究明するという根本的な体制をもっており、それは、すでに実践の領域において見出される人間存在の表現を経ることによって、主体的なものとしての人間存在をあくまでも主体的なものとして、学的に把捉することを目指している。このような倫理学の方法を和辻は、「解釈学的方法」――ディルタイおよびハイデガーの影響のもとで――に求めたのであった。それは和辻によると、「意識せられない生の深み、すなわち非合理

---

[2] 和辻哲郎、『和辻哲郎全集』第 9 巻、岩波書店、1962 年、12 頁以下参照。
[3] 和辻哲郎、同書、136 頁以下参照。

的なる『生』、従って『行為者』、を把捉する唯一の方法」（Ⅸ , 173）であり、その理解は「非合理的なる生の『表現』の理解として、論理的思惟の把捉し得ざるものを理解する」（ibid.）。和辻によると「生」とは、根源的には「間柄において生きていること」（Ⅸ , 175）であり、「実践的行為的な連関」であって、それは和辻のいう「人間存在」にほかならない。したがって和辻は、人間存在の表現を理解することによって人間存在そのものを把捉する方法として、解釈学的方法を要請するのである。

> 生が実は人間存在であることを把捉するとともに、生を生自身から理解しようとする努力はたちまち倫理学としての面目を示して来る。生の表現とは間柄としての存在の表現であり、この表現の理解はおのずから人を倫理に導く。逆に言えばあらゆる間柄の表現は、すなわち社会的な形成物は、ことごとく倫理の表現である。従って倫理学の方法は解釈学的方法たらざるを得ない。（Ⅸ , 175）

こうした和辻の解釈学のうちに私たちは、一種の直覚的理解を志向する根本的態度を認めることができると思われる。すでに示されたように、「人間の学としての倫理学」においては「問うもの」と「問われるもの」とが同一であり、それは人間存在にほかならない。したがって、そのような倫理学の方法として解釈学は、人間存在が人間存在それ自身を問う仕方、つまり人間存在の自己解釈ないし自己解明の仕方として性格づけられる。しかも、「人間の学としての倫理学」において問われる人間存在は「主体的なもの」であって、それは単なる主観–客観関係の枠組みにおいて捉えられるものではなく、換言すれば、そのような人間存在は、対象化的思考においては把握され得ない。それゆえ、そのような倫理学の方法としての解釈学は、単なる対象化とは異なる仕方で――いわば非対象化的に――人間存在を捉えるあり方として理解されなければならない。

また、和辻の所論にしたがえば、学的・理論的立場としての解釈学に先立って、すでに実践的行為的連関において人間存在についての理解が見出されており、これは、人間存在についての初次的・直接的な理解、つまり一種の直覚的理解であるといってよい。すでに見たように、和辻によると「人間の学としての倫理学」は、私たちの周囲に見出されるすべての事物を人間存在の客観化された「表現」と見なすが、そのような表現は、間柄としての人間存在の表現として、すでに相互に了解されている人間存在の表現、つまり、人間存在についての一定の理解の表現にほかならない。そして和辻によると、そのような人間存在はすでに実践の領域において――行為の一契機として――言葉によってもまた表現されており、理論的立場としての解釈学にとっては、このように人間存在についての言語的表現がすでに与えられていることによって、理論的反省において人間存在を一定の意味連関へと転換することが可能となるのである[4]。

さらに私たちは、和辻の指摘するような実践的領域における人間存在の初次的な理解のあり方――つまり、直覚的理解の一様態――を、和辻のいう「風土」現象の体験に認めることができる。

---

[4] 和辻哲郎、『和辻哲郎全集』第 10 巻、39 頁参照。

『風土――人間学的考察――』における和辻の解釈にしたがえば、「風土」現象の体験は、風土的・歴史的に人間が自己自身を理解する仕方そのものであり、それは風土的現象をつうじての一種の直覚的自己理解であるといってよい[5]。

> 我々は花を散らす風において歓びあるいは傷むところの我々自身を見いだすごとく、ひでりのころに樹木を直射する日光において心萎える我々自身を了解する。すなわち我々は「風土」において我々自身を、間柄としての我々自身を、見いだすのである。（Ⅷ, 11）

## Ⅱ　ハイデガーの現象学的解釈学

和辻の「人間の学としての倫理学」の探究のあり方には、周知のように、ハイデガーによる現存在の現象学的分析論の影響が見られる。実際に和辻がハイデガーの現象学的・解釈学的探究に接したのは、文献において言及されているかぎりでは、『存在と時間』のほかマールブルク大学での 1927 年夏学期講義をつうじてであったと思われる[6]。たしかに『存在と時間』のなかでハイデガーは、「現存在の現象学」を「解釈学」として性格づけているのだが、とくに解釈学を問題とする場合、私たちはさらに彼の初期フライブルク講義へと遡及する必要があると思われる。というのも、ハイデガーはとりわけ一連の初期フライブルク講義において、「事実的な生」を現象学的に解釈するという仕方で解釈学的探究を遂行し、あるいはまた「事実性の解釈学」というかたちで解釈学の理念を提示しているからである。『存在と時間』における「現存在の現象学」は、そうした「事実的な生」の現象学的解釈という探究の延長線上にあるものとして理解され得る。

### ⅰ）「生の根源学」

初期フライブルク時代ハイデガーは、ディルタイの「生の哲学」以来の「生」の問題圏を引き受けつつ、フッサールの現象学の方法を取り入れることによって、生のあり方を現象学的に解釈することを試みている。

1919 年戦後窮乏期講義『哲学の理念と世界観の問題』によると、私たちの周囲世界の体験では第一義的に、「私」にとって有意義なものが直接的に――つまり、対象として把握されることなしに――「私」に与えられているのだが、事物を対象として把握するという仕方――理論的態度――は、「私」と周囲世界のものとの有意味な関係を逸してしまい、「私」のそうした体験をその生動性において開示することができない。そこでハイデガーは、生動的な生の体験を捉えるために、事柄を対象化しない前理論的な学的態度を求めようとしており、それを「原初学（Urwissenschaft）」ないし「根源の学（Wissenschaft vom Ursprung）」とよんでいる。そのように生動的な生の体験を捉える仕方として要求される前理論的な原初学とは、ハイデガーによると、「体験すること」と同一であるような「生の共感（Lebenssympathie）」（GA 56/57, 110）といった根本態度である。このような根本態度をハイデガーは、現象学のあり方として理解している。

---

[5] 和辻哲郎、『和辻哲郎全集』第 8 巻、14 頁参照。
[6] 和辻哲郎、『和辻哲郎全集』第 9 巻、182 頁参照。

こうして「生」の問題圏において求められる現象学のあり方をハイデガーは、1919/20 年冬学期講義『現象学の根本諸問題』のなかで、「生の根源学（Ursprungswissenschaft vom Leben）」として提示した。

> 現象学の理念は、生の根源学である。……（中略）……生は発現するものとして、つまり根源から出現するものとして究明されるべきである。（GA 58, 81）

ハイデガーによれば、生は根源から発現してくるものであり、現象学はそのような生をその根源から理解しようとする根源学にほかならない。しかも、そのような生は、所与のものとして具体的で歴史的な事象であり、その意味で「事実的な生（faktisches Leben）」として特徴づけられる。したがって、ハイデガーのもとで理解される現象学とは、このような「事実的な生」をその根源から理解しようとする試みであるといってよい。

ⅱ）「事実性の解釈学」

現象学的方法によって「事実的な生」をその根源から理解しようとするハイデガーは、1920/21 年冬学期講義『宗教の現象学への入門』において、「事実的な生」ないし「事実的な生の経験」という事象を哲学の出発点として位置づけ、このような「事実的な生の経験」の範例として、原始キリスト教における生の経験、すなわち使徒パウロの生の経験を挙げている。ハイデガーの解釈にしたがえば、パウロが信徒へ宛てて書いた書簡は、彼自身の置かれた状況についての「実存的な省察」であり、それらは彼の生の遂行連関のうちにある[7]。また、1921 年夏学期講義『アウグスティヌスと新プラトン主義』におけるアウグスティヌスの『告白』第 10 巻の現象学的解釈に先立って、1919/20 年冬学期講義において示された解釈によると、アウグスティヌスの書いた『告白』は、彼自身の「事実的な生」の遂行を分節したものである[8]。つまり、ハイデガーの解釈によると、パウロの書簡およびアウグスティヌスの『告白』はいずれも、彼ら自身の「事実的な生」の遂行であるとともに、そのような「事実的な生」についての実存的な理解とその分節化にほかならない。このようにハイデガーは、パウロやアウグスティヌスのあり方のうちに、「事実的な生の経験」についての直接的理解の具体的な遂行様態を見出しているのである。

生の「事実性（Faktizität）」の問題を主題化することによってハイデガーは、論文「アリストテレスの現象学的解釈（解釈学的状況の提示）」（1922 年）――通称『ナトルプ報告』――のなかで、「事実性」の問題をめぐる原理的探究として「事実性の現象学的解釈学」という理念を提示した[9]。そして彼は、1923 年夏学期講義『存在論（事実性の解釈学）』のなかで、そのような解釈学のあり方について表明的に論じている[10]。ハイデガーの所論にしたがえば、「事実性」とは、私たちの固有の現存在の存在性格を意味すると同時に、「現（Da）」にあるかぎりでそのつどの

---

7 Vgl. M. Heidegger, GA 60, S. 140.
8 Vgl. M. Heidegger, GA 58, S. 62.
9 M. Heidegger, DJ 6, S. 246f.
10 Vgl. M. Heidegger, GA 63, S. 7 u. S. 14ff.

現存在それ自体を指している。また「解釈学」とは、《理解の理論》や《解釈技術に関する教説》をいうのではなく、原義としての「ヘルメーネウエイン」すなわち「伝えること」の遂行、つまり「解釈する」ということを意味しており、その意味でそれは、事実性としての現存在の存在の仕方にほかならない。このように理解されるならば、「事実性の解釈学」という理念は、事実性としての現存在がそれ自身を解釈するということ、つまり、《事実性としての現存在の自己解釈の遂行》を意味するのである。

ⅲ）「現存在の現象学」

初期フライブルク講義につづく『存在と時間』（1927 年）は、周知のように、ハイデガーにとって哲学の根本的な問いと見なされる「存在の意味への問い」を仕上げようとする試みである。このような存在論的探究としての『存在と時間』において、彼はまず、存在一般の意味を問う存在論への準備――基礎的存在論――として、すでに一定の存在理解をもっている現存在を現象学的に分析し、現存在の存在の意味を取り出そうとする。この『存在と時間』によると現象学は、「自らを示すものを、それがそれ自身から自らを示すように、それ自身から見えるようにすること」（SZ, 34）を意味しており、このような現象学という方法が、存在論の主題となる事象――存在者の存在やその意味など――へのアプローチとその規定の仕方である。それゆえ、ハイデガーによれば、「存在論は現象学としてのみ可能である」（SZ, 35）。このような現象学を彼は、「解釈学」として捉えたのである。

> 現存在の現象学のロゴスは、ヘルメーネウエインの性格をもっており、それをつうじて、現存在自身に属している存在理解に、存在の本来の意味と現存在の固有の存在の根本構造が知らされる。現存在の現象学は、解釈の営みを特徴づけている語の根源的な意味での解釈学である。（SZ, 37）

ここで述べられているように、「現存在の現象学」は根本的に、解釈の遂行という根源的な意味での解釈学として理解されなければならない。このように理解される「現存在の現象学」は、すでに初期フライブルク講義のなかで提示された「事実性の解釈学」の理念、すなわち、《事実性としての現存在の自己解釈の遂行》を意味する解釈学の理念を受け継ぐものだといってよい。

## Ⅲ　解釈学の実践的意味

「事実的な生」ないし現存在の存在の仕方を現象学的に解釈しようとしたハイデガーの現象学的解釈学、また「人間の学としての倫理学」の構想のもとで人間存在の存在構造を解明しようとした和辻の解釈学的方法を、それぞれの思索の理念と根本動向へと眼を向けて顧みると、解釈学という方法的態度の本質的な意味あるいは性格が浮き彫りにされる。

### （a）前理論的態度

ハイデガーの初期フライブルク講義において、また和辻の「人間の学としての倫理学」において、解釈学は、前理論的な学的態度、つまり、事象を対象化しない方法的態度として理解される。す

でに指摘したように、初期フライブルク講義においてハイデガーは、「生の根源学」の理念のもとで、「事実的な生」のあり方を対象化的思考ではない仕方で解明することを目指しており、また、そうした「事実的な生」の直接的理解の範例を、パウロの書簡やアウグスティヌスの『告白』に求めていた。他方、「人間の学としての倫理学」の構想のもとで和辻は、倫理学の問いにおいて「問われるもの」であるとともに「問うもの」であるという主体としての人間の存在の仕方を問うために――換言すれば、単なる主観でもなく単なる客観でもない主体的な人間存在を、主観-客観関係の枠組みを適用せずに問う仕方として――、解釈学的方法を求めている。このように、ハイデガーにおいても和辻においても、そもそも「事実的な生」ないし現存在、あるいは人間存在は、主観-客観関係の枠組みにもとづいて対象化して把握されるような事象ではなく、それゆえにこそ、そうした事象を対象化せずに直接的に――つまり、直覚的に――捉える仕方として、解釈学という方法的態度は理解されているのである。

（b）自己解明の方法

「事実的な生」の現象学的解釈を試みるハイデガーの思索にとって、また人間存在の存在構造の解明を目指す和辻の思索にとって、解釈学は、「事実的な生」ないし現存在、あるいは人間存在の自己解明の方法的態度である。例えば 1923 年夏学期講義『存在論（事実性の解釈学）』において示されているように、ハイデガーは「解釈学」を、その語源に遡って「解釈する」ということとして、つまり解釈の遂行――したがってこれは現存在の存在の仕方のひとつである――という意味で理解し、それゆえ「事実性の解釈学」の理念のもとで、《事実性としての現存在の自己解釈の遂行》という事態を捉えている。しかも彼によると、このような解釈学において、現存在の「覚醒（Wachsein）」――自己自身に対して理解的であること――の可能性が生ずるのである[11]。他方、「人間の学」として構想された倫理学の思索において和辻は、日常的な人間存在の表現の了解、つまり、実践的領域における人間存在についての初次的な理解を探究の出発点とし、そのような初次的な理解を理論的反省にもたらすことによって、人間存在の存在構造を明らかにすることを目指しているが、このような倫理学の解釈学的な思索もまた、問う主体が人間であり、問われるものが人間存在それ自身であるかぎり、やはり人間の存在の仕方のひとつとして、人間存在の自己解明の遂行にほかならない。このように解釈学は、現存在ないし人間存在の自己解明の方法的態度として、つまり、主体的な人間存在の自己遡及的な存在可能性として理解されよう。

（c）実践的理解との関わり

ハイデガーの現象学的解釈学の探究のあり方において、また和辻の倫理学の解釈学的方法においては、学的・理論的立場における哲学的・主題的な解釈に先立つものとして、日常的・実践的領域における実存的・実践的な理解が位置づけられている。『存在と時間』における現存在の現象学的分析論で示されているように、現存在は「気分」の現象――実存論的概念によれば「情態（Befindlichkeit）」――において第一次的・直接的に、自己自身の存在――とりわけ「被投性

[11] Vgl. M. Heidegger, GA 63, S. 15 u. S. 18.

(Geworfenheit)」におけるあり方――を理解している[12]。つまり、現存在の理解は、つねに情態的理解である。そして、ハイデガーによると、こうした理解を仕上げることが「解釈」である。他方、倫理学の問いとして人間存在のあり方を解明しようとする和辻にしたがえば、人間の存在の仕方はすでに実践的行為的に自覚されている。つまり、人間存在とは「間柄」における行為的連関であり、そのうちには人間存在の表現とその了解が含まれているのである。また、すでに指摘したように「風土」現象の体験は、風土的現象をつうじて自己自身を理解する仕方であり、これはまさに実践的領域における人間存在の理解にほかならない。こうした点に示されているように、和辻によると、すでに実践的領域のうちで人間存在についての初次的な理解が遂行されているのであって、このような人間存在についての初次的な理解を理論的反省にもたらす仕方として、学的立場における解釈学的方法が位置づけられているのである。このようにハイデガーや和辻の解釈学的哲学の探究のうちでは、表明的・主題的な哲学的解釈に先行するものとして――そのような解釈の実践の一契機として――、日常的な実践的理解が置かれている。

### (d) 生と哲学との融合

主観–客観関係の枠組みにもとづく対象化的思考ではない仕方で人間存在のあり方を捉えようとする解釈学は、つまるところ、《「生の遂行」と「哲学の思索」との融合》へと向かう志向性をもっていると思われる。初期フライブルク時代ハイデガーは、例えば 1921/22 年冬学期講義『アリストテレスの現象学的解釈。現象学的研究への導入』のなかで、次のように述べている。

> 哲学は、事実的な生についての歴史的な（つまり、遂行歴史的に理解する）認識である。それは、カテゴリー的な（実存的な）理解と分節（つまり、遂行しつつ知ること）へと到らねばならない。(GA 61, 2)（強調は引用者による。）

> 原理的な認識としての哲学は、生の事実性という歴史的なものの徹底的な遂行にほかならない。(GA 61, 111)（強調は引用者による。）

ここに示されているように、ハイデガーにとって「哲学」は、「事実的な生」を「遂行しつつ知ること」――つまり、「事実的な生」の実存的理解――を目指すものであり、したがってそのような哲学は、「事実的な生」についての原理的認識であるとともに、それ自体が「事実的な生」の遂行にほかならない。他方、和辻において「人間の学」として構想された倫理学は、「問い」という仕方においてその主体としての人間存在を解明しようとする学的立場であり、そのかぎりでこのような倫理学の探究は、それ自身人間存在のひとつの仕方であるとともに、その人間存在それ自体の解明を目指すものである。このように、ハイデガーと和辻の解釈学の思索には、《生と哲学との一体化》を志向する哲学的姿勢が認められる。

---

[12] Vgl. M. Heidegger, SZ, S. 134ff.

初期フライブルク講義から『存在と時間』にかけてのハイデガーの思索に見られるように、「解釈学」の理念は、いわば「生」の問題圏のうちで、一定の徹底化を受けているといってよい。「解釈学」の理念をハイデガーは、《解釈技術に関する教説》ないし《理解の理論》としての解釈学とは別様に、解釈の遂行として――つまり、「解釈する」という実践的な意味で――理解したのである。しかも彼は、「事実的な生」ないし現存在の存在の仕方を現象学的に解釈しようとする解釈学的哲学の探究において、学的立場での解釈に先行するものとして、実存的次元における前理論的で直接的な理解のあり方に卓越した意義を認めた。このような実存的理解は、解釈学的哲学にとって本質的な契機となるのである。「人間の学としての倫理学」における和辻の解釈学的方法は、ハイデガーによるこうした「解釈学」理念の徹底化を引き受けるものとして理解されよう。そして、こうした「解釈学」理念の徹底化とともに私たちは、《生と哲学との融合》の立場あるいは直覚への志向性として表明化されている実践的意味を、解釈学の本質契機として見出すことができるのである。

## Ⅳ　解釈学的哲学の可能性

### ｉ）《ラディカルな哲学》の期待と《同一性哲学》への批判

「解釈学」理念の徹底化をつうじて、解釈学という方法的態度には、直覚への志向、あるいは《生と哲学との融合》の立場が現れてくるが、そこには、新しいラディカルな哲学の可能性が期待される。例えばギュンター・フィガールの指摘するように、ハイデガーの思索において関心の的になっているのが、いわゆる対象化的思考や理論的態度に抵抗することであるとすれば、そこで要請される哲学は、ハイデガーの提示する「事実性の解釈学」であるほかはない[13]。なぜならば、この解釈学は、事実性としての現存在それ自身において、いかなる対象化も経ることなく「現存在」という事象を捉えるものであるからである。つまり、ハイデガーの「事実性の解釈学」という理念においては、事実性としての現存在の「存在」と「理解」との統一が示されているのである。こうした解釈学の理念は、新しいラディカルな哲学の可能性を示唆するものであるといってよい。

また、そのような「事実性の解釈学」に関する 1923 年夏学期講義をフライブルクで実際に聴講した田邊元は、ハイデガーのそのような解釈学の理念のうちに、現象学の新しい動向を見出した。田邊がハイデガーの講義の影響を受けて執筆したと思われる論文「現象学に於ける新しき轉向」（1924 年）によると、ハイデガーの「事実性の解釈学」の理念にはフッサール以来の現象学の新しい傾向が認められ、このような解釈学は、「眞に我々が接近の途を有する具體的なる體験に於て完成せられ、……（中略）……それ自身が意識そのものの自覚的発展として認められるやうな現象学」[14] を求める要求に応じるものである。田邊はハイデガーの解釈学の理念のうちに、現象学的哲学の新しい可能性を見たのである。

その一方で、解釈学の理念の徹底化とともに見出される直覚への志向ないし《生と哲学との融

---

[13] Vgl. Günter Figal, *Der Sinn des Verstehens*, Stuttgart 1996, S. 34f.

[14] 田邊元「現象学に於ける新しき轉向」、『田邊元全集』第 4 巻、筑摩書房、1972 年、24 頁。

合》の立場には、学としての哲学の観点から批判が向けられる。例えばカール・フリードリヒ・ゲートマンは、ハイデガーの初期フライブルク講義に見られる哲学のあり方を、「生の同一性哲学（Identitätsphilosophie des Lebens）」と性格づけて、批判している[15]。ゲートマンによると、ハイデガーの思索に見られるように哲学が「事実的な生」と融合してゆけば、それは間主観的な妥当要求を失い、そうした哲学の言明は私的なものになってしまう。つまり、ここで指摘されるのは、「事実的な生」と融合し一体化してゆく哲学は、その哲学的経験の内容を表明的に分節することができないのではないか、という問題点である。《生と哲学との融合》を志向する立場では、問われるべき「生」と問いを遂行する「哲学」とのあいだに隔たりがなくなることによって、もはや学としての哲学の表明性が保障されないと考えられるのである。

たしかに、「解釈学」理念の徹底化とともに見出される直覚への志向ないし《生と哲学との融合》の立場には、新しいラディカルな哲学の可能性が期待されるであろうが、そのような解釈学的哲学もまた「哲学」として遂行されるかぎり、その直覚的理解の内容は表明的に分節され、概念化されねばならないはずである。したがって私たちは、「事実的な生」のあり方を問う解釈学的哲学を、あくまで「学」の視点から検討することが必要である。

ⅱ）「事実的な生」の直覚的理解の分節化

ハイデガーによる「解釈学」理念の徹底化によって、解釈学は、根源的には「解釈の遂行」の意味で理解され、しかもハイデガーや和辻の思索における解釈学的哲学の遂行にあっては、学的立場での解釈学に先行するものとして、実存的･実践的領域における直接的理解に、「事実的な生」や現存在、あるいは人間存在について初次的に開示するという意義が見出された。すでに見たように、ハイデガーにしたがえば、現存在の「気分」の現象は、その事実的な被投性のあり方を開示する直接的理解の一様態であり、また和辻によれば、日常の実践的領域において間柄としての人間存在はすでに実践的行為的に理解されている。

そうした実践的領域における初次的な直接的理解を現象学的に解釈すること――いわば理論的反省にもたらすこと――によって、学的立場における解釈学の遂行が果たされる。和辻によれば、とりわけ陳述（言語的表現）のうちでより詳しく人間存在についての一定の理解が表現されており、このようにすでに実践的領域において人間存在の理解が言語的表現にもたらされていることによって、学的立場における解釈学が可能となる。とくにハイデガーは 1920/21 年冬学期講義『宗教の現象学への入門』等に見られる《宗教の現象学》において、とりわけパウロの書簡やアウグスティヌスの『告白』を、彼ら自身の「事実的な生」の実存的理解の分節化として捉え、そのようなテクストを現象学的に解釈することによって、「事実的な生」のあり方をその生動性において捉えようとしたのであった。

こうした問題圏において私たちは、「事実的な生」や現存在、あるいは人間存在の直接的理解を卓越したかたちで分節するものとして、さらに詩歌を挙げることができるであろう。すでにデ

[15] Vgl. Carl Friedrich Gethmann, Philosophie als Vollzug und als Begriff. Heideggers Identitätsphilosophie des Lebens in der Vorlesung vom Wintersemester 1921/22 und ihr Verhältnis zu Sein und Zeit, in : *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd. 4, Göttingen 1986-87, S. 44f.

ィルタイは、詩作を「生理解の器官（Organ des Lebensverständnisses）」[16] と特徴づけ、詩作ないし詩歌に、生についての理解を開示するという卓越した意義を認めていた。

> 生それ自体の連関とその意味が生から輝き出るように出来事を見せるのが、最も偉大な詩人の技巧である。こうして詩歌は私たちに、生についての理解を開示する。偉大な詩人の眼によって私たちは、人間的な事物の価値と連関に気づくのである。[17]

さて、「風土」現象の体験は、和辻によると、人間存在の自己理解の仕方であり、これは人間存在の直接的理解のひとつといえる。とりわけ「俳句」という詩作は、「人の姿を花鳥に見、人の心を風月に知ること」[18] として、まさにこうした風土的自己理解の分節化の一形式といってよいであろう。

> 此秋は何で年よる雲に鳥

例えば芭蕉のこの一句は、自己理解としての「老い」の実感を、自然の悠久の時のうちある有限な人間存在の感慨として、俳句の形式において表明的に分節したものといえる。

> ……抜けるような青空にぽつんと浮かぶ雲、そのあたりを悠然と飛ぶ鳥、おそらく日没にはまだ間のある明るい秋空を思わせるこの風景は、悠久の時のなかを自由に漂泊する孤独な存在への憧れと共感を伝えるとともに、……どこかキリコの絵や朔太郎の詩に通じるような、近代的な憂愁の気を濃厚にただよわせている。……陶淵明の詩に見られるような、天地自然の永遠のめぐりに対する老荘的な虚無感と諦念と言い換えてもよかろう。（……は引用者による省略。）[19]

しかも、和辻の指摘にしたがえば、芭蕉の俳句、つまり自然観照は、芸術的活動にとどまらず、倫理的・宗教的な生の実践でもあった。

> 特に東洋的なる詩人芭蕉は、単に美的にのみならず倫理的に、さらに宗教的に自然に対したが、そこに知的興味は全然示さなかった。自然とともに生きることが彼の関心事であり、従って自然観照は宗教的な解脱を目ざした。かかることは東洋の自然の端倪すべからざる豊富さを待って初めてあり得たことであろう。人はかかる自然に己れをうつし見ることによって、

---

16 Wilhelm Dilthey, *Die geistige Welt : Einleitung in die Philosophie des Lebens ; Hälfte 1, Abhandulungen zur Grundlegung der Geisteswissenschaften*, Gesammelte Schriften, Bd. 5, 8. Aufl., Göttingen 1990, S. 394.

17 Wilhelm Dilthey, *Das Erlebnis und die Dichtung : Lessing, Goethe, Novalis, Hölderlin*, Gesammelte Schriften, Bd. 26, Göttingen 2005, S. 127.

18 高浜虚子、『俳句への道』、岩波書店、1997 年、59 頁。

19 川本皓嗣、『日本詩歌の伝統――七と五の詩学――』、岩波書店、1991 年、176 頁。

無限に深い形而上学的なるものへの通路をさし示されていることを感ずる。偉れたる芸術家はその体験においてかかる通路をつかみ、それを表現しようとするのである。（XX, 203）

ここに示されているように、芭蕉にとって自然と対峙して俳句をつくることは、文芸であると同時に、「自然とともに生きること」の実践であり、それゆえ俳句は、そうした生き方における自己理解の表明化であったといえる。つまり、芭蕉の俳句は、とりわけ自然との関わりのなかでの「事実的な生」の遂行であるとともに、そのような生の理解の分節であって、これはまさに、「事実的な生」の実存的理解ないし遂行知の分節化にほかならない。

こうして私たちは、パウロの書簡やアウグスティヌスの『告白』と同様に、芭蕉の俳句をもまた、「事実的な生」の実存的理解を分節した典型的なテクストとして特徴づけることができるであろう。こうしたテクストを現象学的に解釈することにこそ、ハイデガーの目指した解釈学的哲学の本分が存しているのである。

**【文献】**

本文および注において、ハイデガーのテクストは次の略号によって示している。また、本文中、ハイデガーのテクストの引用箇所は、略号に頁数を併記して示している。

GA 56/57 : Martin Heidegger, *Zur Bestimmung der Philosophie*, Gesamtausgabe, Bd. 56/57, Frankfurt a. M. 1987.

GA 58 : Martin Heidegger, *Grundprobleme der Phänomenologie (1919/20)*, Gesamtausgabe, Bd. 58, Frankfurt a. M. 1993.

GA 60 : Martin Heidegger, *Phänomenologie des religiösen Lebens*, Gesamtausgabe, Bd. 60, Frankfurt a. M. 1995.

GA 61 : Martin Heidegger, *Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung*, Gesamtausgabe, Bd. 61, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1994.

GA 63 : Martin Heidegger, *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*, Gesamtausgabe, Bd. 63, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1995.

SZ : Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 15. Aufl., Tübingen 1984.

DJ 6 : Martin Heidegger, Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles, in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Bd.6, Göttingen 1989.

また、本文中、和辻のテクストの引用箇所は、『和辻哲郎全集』の巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）を併記して示している。

（ささきまさとし　高知工業高等専門学校）

# Die praktische Idee der Hermeneutik
## — Zur Möglichkeit der hermeneutischen Philosophie des Menschseins —

Masatoshi SASAKI

In seiner Konzeption der Ethik begreift Watsuji diese Disziplin als „Wissenschaft vom Dasein“, und in diesem Sinne bedeutet sie ihm eine Frage nach der Seinsweise des Daseins. In dieser Problematik nimmt er jede alltägliche Wirklichkeit als Ausdruck des Daseins und versucht, dadurch zu seiner Existenzstruktur zurückzufragen. Als Methode der Ethik in seinem Sinne bedient er sich der Hermeneutik, um die Ausdrücke zu verstehen.

Im Denken Watsujis findet man die Wirkung der hermeneutischen Philosophie Heideggers rezipiert. Vor allem in seiner frühen Freiburger Zeit versucht Heidegger, das faktische Leben phänomenologisch auszulegen, und zeigt die Idee „Hermeneutik der Faktizität“ als Vollzug der Selbstauslegung des Daseins. Auch „Phänomenologie des Daseins“ in *Sein und Zeit* bezeichnet primär Hermeneutik im Sinne des Vollzugs der Auslegung.

Sowohl bei der hermeneutischen Methode Watsujis wie auch bei der phänomenologischen Hermeneutik Heideggers könnte man die Intention zum intuitiven Verstehen oder die Stellungnahme der Einheit von Leben und Philosophie finden, und diese praktische Idee dürfte als wesentliches Moment der Hermeneutik bezeichnet werden.

Bei dieser Idee der Hermeneutik kann man zwar eine Möglichkeit einer radikalen Philosophie erwarten, aber bei ihr muß man andererseits nach der Artikulationsmöglichkeit des intuitiven Verständnisses fragen. Als eine exemplarische Artikulationsweise eines solchen Verständnisses dürfte sich die japanische Dichtung *Haiku* erweisen, in der das Verständnis des faktischen Lebens erschlossen ist. Indem sie einen exemplarischen Text wie *Haiku* phänomenologisch auslegt, kann sich die hermeneutische Philosophie des faktischen Lebens auch wissenschaftlich vollziehen.

「キーワード」
解釈学、実践的理解、事実的な生、和辻、ハイデガー